

今だから伝えられることがあります。

10年前、私は肺炎のため、この世とお別れしました。決して、たばこによる病気じゃないから安心してね。姿は見えないけど、声は聞こえないけど、娘の手になり、娘の言葉に代わってお話ししたいと思います。

もう30年近く前のこと。医師より、「よくて1年。早ければ半年の命です。覚悟しておいて下さい。」と宣告されました。あなたの命に限りがあると知った時、手を握り耐える事も流した涙をぬぐう事さえもできなかった。それは、あまりにも急で、あまりにも若すぎた。一日一日と筋力が失われ、あなたの体は丸太ん棒のようになり身動きできなくなったね。話すことはおろか呼吸することさえも十分にできなくなったよね。あなたの心臓はあとほんの僅かな機能しか残っていなかったんだよ。忍びよる形の見えない病魔は、生きる証である呼吸を止めようとしていた。集中治療室で酸素テントの中、精一杯生きようとする姿がそこにあった。一体何が起きているのか？どんな明日が来るのか？考えたくもなかった。あなたが生まれてから今までが走馬燈のようにつけてくれたのを覚えています。

私がたばこを吸い始めたのは単身赴任をするようになってからでしょうか？話す相手もなく、毎日飲みに行くわけでもなく、なんとなく口淋しくなり、吸うことで気を紛らわせていたのかもしれない。昔人間なので格好よくキセルたばこでしたね。帰省してあなた達の健やかな成長ぶりを幸せに思い、いつもキセルを銜えると「手でコロコロして！輪っか作って！」と無邪気にせがんできたよね。父さんは嬉しかった。だから、吸いたくもないたばこが止められなかったのかもしれないね。そんなこんなで、あなたも中学生。制服の似合う乙女になりつつあった。

そんな時、思いもよらぬあのような難病にかかったね。苦しい検査にも耐え、痛い治療も我慢して受けたね。泣きながら手術室に入ったこともあったね。父さんは心底、あれほど頑張れる娘だとは思っていなかった。握ったこぶしがブルブル振るえても泣き言一つ言わず歯を食い縛って耐え抜いたね。本当によーおく頑張ってくれました。あなたのそんな姿を見てできる事なら代わってやりたかった。でも、代わってやれるはずがない。何一つしてあげることもできず情けなかったんだよ。『自分には一体、何ができるのか』と考えた時、素直にた

ばこを止めようと思った。こんな事位しかできない父さんを許しておくれ！弱い人間だと笑っておくれ！でも、あの時はこれしかなかったんだよな。そこで、約束したよな？「父さんはたばこ止めるから、あなたは病気に負けないで前向きに明るく強く生きてほしい。」と指切りしたね。たばこをやめようと思っても、そのきっかけがなかった。ただ、あなたの病気を治してやりたい！その一心だった。父さんの苦しみなんてあなたの辛さや痛みには比べれば、苦しみじゃない。そんな気がする。父さんは迷いなくすぐ止めることができた。でも、あなたはそれから30年近くも苦しみがきながら辛抱しました。度重なる入院。今回で7回もの手術。あなたのお腹は縦・横・斜めとぞうきんのようになっちゃったね？でも、その傷痕が生きてきた証なんだよ。胸を張って生きるんだぞ。父さんは、姿がないけれど、いつも、あなたの後ろにいるんだから……四人兄妹の末っ子のあなたが一番、心配なんだ。特に、今回の最終的な手術だが、よく考えてくれた。泣きながら訴えていた姿は父さん、胸が張り裂けそうだった。よく決心してくれたな。食道の一部がなくなり胃は全摘。食道と腸をつなぎ合わせ、十二指腸を小腸につなぐという手術。応援してたよ。願いは叶って大成功だったね。よかった。よかった！父さんとあなたと二人の約束。「たばこを止める。」「病氣と闘うこと。」30年かかって、やっと今、約束をはたしたね。本当にあなたは力強くたくましいおれの娘だ！身体は小さいけれど、どこにあれほどのパワーがみなぎっているのか、不思議でならない。

あなたはたくさん生きることの喜びを教えてくれたね。「頑張らない」けど「諦めない」厳しい状況におかれた時、命の仕組みを知り、命にも限りがある。その限界の中で自分らしく生きる事。悔いの残らないように生きる事。残された僅かな体力を使って子供の弁当を作ろうとする母親の思いだよ。過酷な現実があるがままだに受け入れながら、与えられた命を決して無駄にせず、毎日を丁寧に生きる姿があなたには多いにある。生命のエネルギーがあるからこそ、グチグチ色々な物に衝突しているんだよ。このエネルギーがいつか生きるための本物の力と変えられる時が必ず来るから。

父さん。もう思い残すことは何もないよ。安心して、命の源に帰れるよ。

ありがとな！